

□ 書評 □

今川忠男(著)

発達障害児の新しい療育 —こどもと家族とその未来のために—

西脇美佐子
(南大阪療育園訓練部)

著者は1973年から小児理学療法士として働いてきた。最初の21年は肢体不自由児施設で、その後、重症心身障害児施設・旭川児童院に移って6年、最近では倉敷中央病院 NICU の子どもたちの早期療育にもかかわり、まさに障害を持って生まれてきて、障害を持ちながら人生を歩み、障害を持ったまま亡くなっていく人たちの生涯を見てきた。その著者の最大の関心事は子どもの持つ障害ではなく、障害を持った子どもであり、彼らの自立を援助することである。彼らの自立を援助するために、「彼らが抱えている問題を解決するにはどうしたらよいのだろうか」がいつも著者の出発点である。その解決法を求めて試行錯誤を繰り返し、その卓越した語学力をもって文献をむさぼる。解決の糸口になると思えば世界にも出向いていく。

著者が理学療法士として働き始めたのは、理学療法の対象がポリオ患者から中枢神経損傷患者へと変化し、筋再教育に代わって神経生理学的アプローチが台頭してきた頃である。著者は1975年にボバース夫妻のもとでボバース法について学び、その後、公認インストラクターとしてボバース法の日本での発展に貢献し

た。神経生理学的アプローチの出現によって、脳性麻痺を中心とした発達障害児が理学療法・作業療法の対象として明確に位置づけられ、彼らに対する適切な療育が必要であるという認識を高めたことにおいて重要な意義があった。

しかし近年、科学とりわけ運動科学の発展に伴って小児理学療法・作業療法に新しい動きが生じてきた。従来の訓練法では中枢神経系が運動発達変化を引き起こす唯一の構造、原因であるとしてきた。しかし、神経生理学因子・生体力学因子・認知科学因子・課題条件因子という多くの因子が運動発達に影響を及ぼしてきていることが判明してきた。運動科学の発展は小児理学療法・作業療法の根底を支える理論の変化をもたらしただけでなく、子ども中心療育から家族中心療育、生活目的指向療育、訓練室環境療育から地域・家庭を基盤とした療育へと理学療法・作業療法の実践にも影響を与えている。

著者は神経生理学的治療理論中心の療育を再考し、新しい療育の必要性を誰よりも早く認識し、講演、執筆活動を通して、理学療法士・作業療法士に向けて発信し続けてきた。「発達障害児の新しい療育」はそれらの集大成である。本書は、経験の長い療法士には古いモデルに必ずしも執着しない新しい考えに耳を傾け、それに挑戦しようとする意志を持つことを勧め、若い療法士には夢と情熱を抱いてこの世界に飛び込んだ先輩理学療法士の生き様がきっと勇気と希望を与えてくれるであろう。

● B5 頁180 1999 定価(2,800円+税) 〒340
三輪書店・刊